

# 令和5年度全国学力・学習状況調査 中学校英語「話すこと」調査の実施方式について（案）

資料4

- 全国学力・学習状況調査では、平成31年度（令和元年度）より、中学校で英語調査を実施しており、次回は令和5年度に実施予定（中学校約1万校）。
- 英語調査（「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと」）において、前回（平成31年度）調査における「話すこと」調査は、CBT（USB方式）で実施。
- 次回は、GIGAスクール構想による環境整備を踏まえ、CBT（オンライン方式）で実施。また、調査全体のCBT化（令和6年度から順次導入）の試行・検証段階であることなどを踏まえ、調査日を一定期間とり、日にちを分散して実施。

	前回（平成31年度）の実施方式	次回（令和5年度）の実施方式（案）
日程	調査日当日に同日一斉実施 ※結果を全国値（参考値）として公表。	一定期間内（2週間程度）で学校数を分散して実施 ※全国学力・学習状況調査全体のCBT化における試行・検証段階であることを踏まえ、調査日当日は250～500校程度で実施し、その結果を全国値として公表予定。 （その他の学校は、調査日翌日以降で、各学校の都合のよい日で実施し、結果は「参考値」として各学校等へ結果返却を行う。）
方式	各学校のコンピュータ教室等のPC端末 USBを利用したオフライン方式	一人一台端末を用いたオンライン方式 （MEXCBTを活用予定）
状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推奨環境に満たないOSの使用やPC台数の不足、事前検証ツールが正常に作動しなかったなど、PC環境等が十分ではなく、設置管理者の判断で、434校（約5万人）で実施しなかった（特例的な措置）。</li> <li>・音声データの欠損が一部で発生したことや、音声データの回収等に手間がかかり学校現場への負担が大きかったとの指摘があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンライン方式による実施は、テキストデータよりも、データ量が格段に大きい解答音声データを取り扱うことから、CBT方式の中で技術的に特に難易度が高いため、調査全体のCBT化に向けた工程の一部（試行・検証段階）として位置づけた上で、実施。</li> <li>・本WGの「最終まとめ」において、次回「話すこと」調査は、教育委員会等の意見も踏まえつつ、技術的に可能な範囲で実施することが<u>適当</u>、とされている。</li> </ul>

中学校英語「話すこと」調査は、テキストデータよりもデータ量が格段に大きい解答音声データを取扱うことや、学校における録音環境の事前確認をどのように行うかなど、CBT方式の中でも技術的に特に難易度が高い。平成31（令和元）年度にCBT（USB方式）で実施された際、欠損データが発生したことや、音声データの回収等に手間がかかり学校現場への負担が大きかったとの指摘も十分に踏まえ、慎重に検討・準備を進めていくことが必要である。

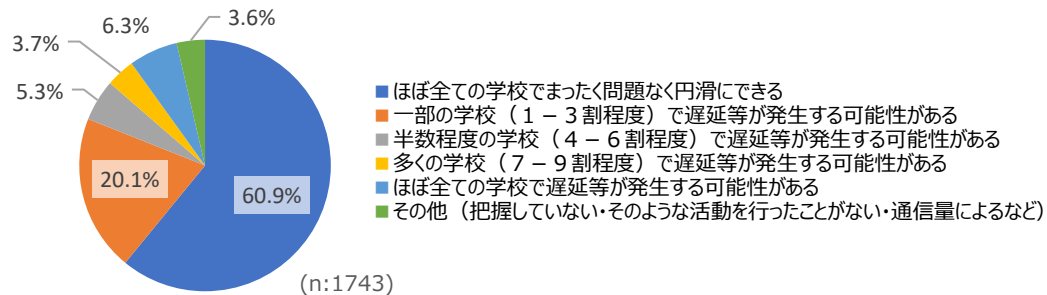
これらを踏まえ、次回の中学校英語「話すこと」調査については、全国学力・学習状況調査全体のCBT化に向けた工程の一部として位置づけた上で、教育委員会等の意見も踏まえつつ、技術的に可能な範囲で実施することが適当である。

### 令和5年度中学校英語「話すこと」調査の実施方式に関する教育委員会アンケートの結果（令和3年12月）

○1つの学年全体で同時にインターネット接続をする活動について、約6割が「ほぼすべての学校で円滑にできる」と回答したものの、約4割は「遅延等が発生する可能性がある」と回答。

○「同時に複数回線がアクセスすることによって通信環境が不安定となる」「接続速度が十分でなく、公平な調査にならない」といった通信環境に関する意見も100件以上あった。

各生徒が1人1台端末を用いて、1つの学年全体で同時にインターネット接続をする活動（デジタルコンテンツの使用等）について、域内の学校はどのような状況であると把握していますか。



➡ 次回（令和5年度）の中学校英語「話すこと」調査は、調査全体のCBT化の試行・検証段階であることなどを踏まえ、調査日を一定期間とり、日にちを分散して実施